ISSN 1345-0123

2023年8月12日発行（毎月1回12日発行）第25巻 第9号通巻341号 平成11年6月25日第3種郵便物認可

地域ケアリング

8

2023 Vol.25 No .9

特集

認知症とともに生きる：共生の実現にむけて

特集編集
永田 久美子
認知症介護研究・研修東京センター副センター長（兼）研究部長

あの人にインタビュー

つばさグループ
株式会社オールプロジェクト 代表取締役
津金澤 寛

地域ケアリング

August 2023 CONTENTS

1　あの人にインタビュー　津金澤 寛（つばさグループ 株式会社オールプロジェクト 代表取締役）

特集　**認知症とともに生きる：共生の実現にむけて**

8　超・超高齢社会の活路を拓く 認知症とともに生きる希望を広げ、ともに生きる活力のあるわがまちを
General remarks: Beyond a super aged society: Spreading hope for living with dementia and cultivating vibrant, symbiotic communities
永田　久美子（認知症介護研究・研修東京センター副センター長（兼）研究部長）
Kumiko Nagata　Tokyo Center for Dementia Care Research and Practices

16　これからの新常識：認知症とともに生きる 私たち本人が、暮らしと地域をいっしょに創る
The new normal in the future: We who live with dementia create our lives and communities together
藤田　和子（一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 代表理事）
Kazuko Fujita　Japan Dementia Working Group

22　本人の声をすべての起点に：認知症バリアフリーのまちを総活躍で実現
Making the individual's opinion the starting point for everything: Realizing a barrier-free town for dementia with all efforts
谷口　泰之（御坊市役所 市民福祉部 介護福祉課 地域支援係 係長）
Yasuyuki Taniguchi　Gobo City Hall Citizens' Welfare Department Community Support Section, Care and Welfare Division

28　アクション農園倶楽部で出会い、つながり、自然体の共生へ
Encounters, connections, and coexistence at Action Farm Club
國松　明美（湯沢町健康福祉部健康増進課 主任介護支援専門員）
Akemi Kunimatsu　Yuzawa Town Health and Welfare Department Health Promotion Division

34　認知症の本人とともに「働き方改革」介護も子育てもお互いの力を活かして共生の地域に
Work style reform with people with dementia — Careing and child-rearing make use of each other's strengths to create a symbiotic community —
鈴木　裕太（社会福祉法人新生寿会 きのこ地域連携室 室長）
Yuuta Suzuki　General Manager, Shinseikai Kinoko Community Liaison Office

---

福祉・医療の現場から

40　◎認知症前臨床期の早期発見・改善に向けた抑制機能を指標とするアプリケーション開発
兒玉 隆之　Takayuki Kodama

44　◎認知症患者は指タップ能力が低下しやすい
鈴村 彰太　Shota Suzumura　杉岡 純平　Junpei Sugioka　近藤 和泉　Izumi Kondo

47　◎ケア現場で働く在日外国人ケア労働者と日本人スタッフの協働文化の構築に向けて
畠中 香織　Kaori Hatanaka　山本 恵美子　Emiko Yamamoto　田中 共子　Tomoko Tanaka

50　◎問題解決システムとしての生成的地域包括ケアシステム論の構築
大下 由美　Yumi Oshita

56　◎軽度認知症の人の自己を支えるケアガイドライン開発に向けて
土岐 弘美　Hiromi Toki　中平 洋子　Yoko Nakahira　小原 弘子　Hiroko Kohara

58　◎生活保護受給におけるスティグマと生活保護利用の選択への影響―生活保護受給経験のある野宿生活者の語りから―
白井 裕子　Hiroko Shirai

63　◎老年医学卒前教育の15年間の変化
金子 英司　Eiji Kaneko　阿部 庸子　Yasuko Abe

67　◎在宅療養者の災害時の備えを継続的に更新・把握できる訪問看護師のための手法の検証
渡邊 朱美　Akemi Watanabe　森戸 雅子　Masako Morito
宮崎 仁　Hisashi Miyazaki　大始良 義将　Yoshimasa Oaira

70　◎「自分らしく」最後まで生き抜くを支援する
尾形 由起子　Yukiko Ogata

72　◎認知症におけるタウタンパクの蓄積と認知機能脳病態の評価
肥田 道彦　Michihiko Koeda　舘野 周　Amane Tateno　大久保 善朗　Yoshiro Okubo

76　◎生活支援コーディネーターの役割と彼らが開発した総合事業の現状―総合事業を利用する高齢者と支援者の日常生活より―
鈴木 岸子　Kishiko Suzuki

80　◎FPPのメディカルフード的役割による認知症予防への試み
大里 真幸子　Maki Osato

83　◎嚥下模型操作による液体食品の誤嚥の防止に対するとろみの効果の評価
吉田 雅典　Masanori Yoshida　鶴田 裕子　Yuko Tsuruta
髙子 雄一朗　Yuichiro Takako　鈴木 崚太　Ryota Suzuki

88　◎地域に潜在する支援が必要な状態にある高齢者への予防的介入―セルフ・ネグレクトの発生要因である危機的ライフイベントに着目して―
岡本 名珠子　Namiko Okamoto

91　◎認知症家族介護者に対する認知行動療法―自責感―
齋藤 嘉宏　Yoshihiro Saito

© Hokuryukan, August 2023 当社は、その理由の如何に係わらず、本誌掲載の記事（図版・写真等を含む）について、許諾なしにコピー機による複写、他の印刷物への転載等、複写・転載に係わる一切の行為、並びに翻訳、デジタルデータ化等を行なうことを禁じます。無断でこれらの行為を行いますと、損害賠償の対象となります。
（株）北隆館　著作・出版権管理室　TEL：03-5720-1162

特集

認知症の本人とともに「働き方改革」

介護も子育てもお互いの力を活かして共生の地域に

社会福祉法人新生寿会 きのこ地域連携室 室長 鈴木 裕太

●すずき ゆうた●
江戸川大学総合福祉専門学校卒業後、新生寿会ジロール神田佐久間町のオープニングスタッフとして入職。その後、地域密着型多機能ホーム東五反田倶楽部の管理者を経て、現職。認知症介護指導者。品川区に認知症地域支援推進員の必要性を具申し任命されて活動中。

●あらすじ●
地域密着型サービスの事業所として、認知症になってからも本人が地域で住み続けていくための試行錯誤を、身近な地域の人たちや多様な専門職と積み重ねてきている。地域の人や子供たち、職員、そして本人の声から生まれた夏祭りの復活、地域食堂、駄菓子屋、書道教室、企業との協働、子連れ出勤の経緯を紹介する。その過程で、本人が本来の力や姿を取り戻し、その姿に触れて家族や地域の人、専門職の意識が変わり、日々の中で自然体で「ともに」過ごし、支あう場面が広がっている。職員が安心して子供を産み育てながら働き続けるための子連れ出勤は、人材確保や離職対策、人としての成長に大きな効果があり、本人たちの喜びや活力を生んでいる。

● Work style reform with people with dementia — Careing and child-rearing make use of each other's strengths to create a symbiotic community —

Yuuta Suzuki
General Manager, Shinseikai Kinoko Community Liaison Office

1. 地域の中にある事業所としての一歩一歩

(1) スタートは、地域で暮らす人たちとの話合いから

社会福祉法人新生寿会は、2017年5月、品川区に、品川区立東五反田地域密着型多機能ホームとして、小規模多機能型居宅介護と認知症対応型共同生活介護（グループホーム）を開設しました。

開設前から、認知症になっても地域で住み続けていくためには、事業所が地域と連携し、一緒に地域を創っていくことが重要と考えてきました。

開設前に、町会や地域の方々と話し合う機会を設けました。町会の方に、この地域はどんなところなのか、どんなところだったのかを尋ねました。「現在の町会役員は高齢化している」、「若い人たちが町会に入ってこない」、「マンションが多く、若い世代の転入はあるものの、転出も多かったり、町会に興味のない方が増えたりと町会との繋がりは希薄になっている」、「この町会は神社の宮元で、毎年夏になると祭りがあり神社周辺には多くの出店が並び賑わっていた」、「町会としても縁日をやっていたが、公園がなくなってマンションになった

り、近隣住民の苦情もあったりして、40年以上前にやらなくなってしまった」という話を聞きました。昔は良かった、楽しかったなどの話になりました。

（2）介護事業所が地域の人たちと、一緒にできることを話しあう：夏祭りの復活

事業所の職員たちとともに、地域の人たちと私たちが一緒に何ができるのかと考え、夏祭りを復活できないかと提案することにしました。町会や地域の人たちに提案したところ、みなさんとても喜び、夏祭りを行うことになりました。何度も地域の人たちと話しあいを重ね、2017年8月、第1回のあいおい夏祭りを開催することができました。

開催前、町会の方々は「そんなに人は来ないんじゃないか」、「本当に自分たちにできるのか」など不安もありましたが、実際に行ったところ会場を埋め尽くす大勢の方が参加しました。

町会の方々は、「こんなに沢山の人が来てくれて嬉しかった」、「自分たちでもやればできるもんだね」、「また、やりたいね」と話していました。この夏祭りがきっかけで、多くの方に事業所の存在や介護職員が地域の中で汗を流す姿を知ってもらうことができました。

写真1　隣のマンションの人たちと、地域食堂をオープン。美味しい手料理を、地域の老若男女、そして利用者も一緒に。

（3）地域交流スペースを活かし、隣のマンションの人たちと地域食堂をオープン

2018年1月からは、事業所の隣のマンションの自主グループの方々と、事業所の地域交流スペースを利用して、地域食堂を月に1回、開始しました。こども食堂をやれないかとはじめは話していましたが、近隣の学校や町会等と話していく中で、地域で必要としている子供から高齢者まで誰もが集える場がいいのではないかと地域食堂（東五反田食堂）を開催することになりました。

参加している方は、両親が共働きの為、一人で食事をしていた子や独居高齢者、高齢者夫婦など様々な方です。提供される食事は、マンションの人たちによる毎回手づくりの一汁三菜と栄養バランスがしっかりと取れた料理です。

事業所の利用者にも手作りの食事が提供され、一緒に食べたり配食されたりもします。地域住民や子供、高齢者、事業所の利用者が交流する大きな機会にもなりました（写真1）。

（4）子供たちの声から駄菓子屋がスタート：利用者が自然と交わり変化が生まれる

地域食堂以外にも様々な取り組みを通じて地域との繋がりが広がっていきました。その一つが、駄菓子屋です。地域食堂に通っ

夏祭りの復活をきっかけに、事業所の存在や介護職員を知ってもらうことができました。

地域交流活性化のために地域食堂だけでなく、交流スペースに駄菓子屋を回転しました。

ていた子供の「お菓子が食べたい」がきっかけで始まりました。お菓子が食べたいと言った子に駄菓子屋で買ってきてもいいよと声を掛けたところ、「駄菓子屋って何？」と返されたことがきっかけでした。私自身、子供のころには沢山の駄菓子屋があって欲しいものを探しに色々なお店に通ったものです。そのお店のおばあちゃんとあいさつしたり話したりその中でコミュニケーションや人とのつながりを感じてきたのかもしれません。

しかしながら、子供のひと言を地域の人たちに伝えたところ、この地域には昔から駄菓子屋はないということを地域の人たちから聞き、何とかできないものかと考え、事業所の地域交流スペースで駄菓子屋を開店することにしました（写真2）。

開催後は、口コミで子供たちの来客は増えました。それに伴い、利用者にも変化がおこりました。事業所に通うのを拒んでいた利用者が、子供たちが来るなら嬉しいと接客や子供たちの相手を積極的にしてくれるようになりました。他の利用者も得意のそろばんを片手に会計係を担ってくれました。子供たちに、「そろばんすげぇ」「かっこいいと」言われ、毎日楽しく過ごしました。子供たちだけでなく、その保護者や大人の来店も増えました。子供から大人まで自然と事業所の利用者と交流する機会が増えていきました。

写真2　食堂での「お菓子食べたい」の子供の声から、町になかった駄菓子屋を、地域交流スペースでオープン。おたがい大喜び。

写真3　「また書道を・・・」。本人の声から始まった書道教室。事業所の交流スペースにて。

(5) 本人が望むことを子供たちや地域の人たちとともに：本人が書道で活躍

ちょうどその頃、グループホームに入居していた80代の女性Aさんが、一人で外に出られるなど、落ち着かない様子が頻繁にみられていました。本人は書道の師範で、以前は書道教室でたくさんの子供たちを教えておられました。「書道をまた教えたい」。そんな声がきかれ、「交流スペースで、地域の子供たちに書道を教えてみませんか」と提案をしてみたところ、とても乗り気。

近所に呼び掛けて、書道教室が始まりました。集まってきた近所の子供たちを前に、本人が驚くほどしっかりと、書道の心得を語り、手ほどきをされました（写真3）。子供たちや親御さんたちにも大好評で、月2回、定期的に教室を開くことになりました。

本人は、顔なじみのこどもたちに、毎回、「はじめまして」と切り出しますが、子供たちは次第に慣れて、本人を先生と慕って腕を磨いていきました。その中の一人が、書道のコンクールで入賞し、その子も、本人も、みんなも大喜び。

本人自身も徐々に書道の腕を取り戻し、職員からの情報と提案で、品川区のイベントの横断幕で、本人が達筆をふるうことができました。

自宅ではない場で暮らすようになっても、また一時混乱が見られている人であっても、本人が誇りとして、やりたいと望むことをやれる機会を子供たちも含めて地域の人たちとつくると、こんなにも見事に立ち直って堂々と暮らせることをAさんが身をもって証明して下さったと思います。

写真4　子連れ出勤した職員の子供たちと本人。子供たちも、本人たちも、職員も、そして事業者も、みんなが笑顔に。

2．仕事も子育ても両立して働ける環境を：子連れ出勤で、ともに、息長く

（1）介護の人材不足の解消を、職員視点、本人視点で工夫する

施設運営をする中で、大きな課題となっていたのが人員不足です。この課題を解決するために取り組みだしたのが子連れ出勤です。私たちの法人では、正社員として働いてきた職員が子供を連れて出勤するという取り組みを、何年も前から実践してきました。結婚や出産を機に退職したり、保育園に子供を預けられないため復帰することが難しかったりといった事案がありました。

育児と仕事を両立することができれば退職は減らせると考え、子連れ出勤が2010年からはじまりました。子連れ出勤をすることは、働く側にとっても、利用者にとっても良い面が多いです。利用者が笑顔になり、子供たちの相手をすることも日常茶飯事です。一緒に遊んだり、食事をしたり、散歩へ出かけたり、洗濯物をたたんだりと大きな家に小さい子供からお年寄りまでが一緒に住んでいるといった雰囲気です。おじいちゃんやおばあちゃんと接する機会が少ない子供たちにとって、貴重な経験です。子育てを経験してきた利用者はお母さん（職員）よりも育児に慣れていて、あやしたり、遊んだり、危ない時にはしっかりと叱ったり。子供にとってもお母さん（職員）にとっても利用者にとっても、貴重な時間になっています（写真4）。

施設運営の人員不足を解決するために始めた子連れ出勤は、利用者にとっても良い面があります。

多様な専門職との地域連携を深めるため、ファーム・エイドという取組を開始しました。

（2）離職対策と同時に、新規職員の確保にも効果・働きたい人たちの声と力を活かす

今までは働いてきた職員向けの子連れ出勤でしたが、2018年新規の職員の求人に、子連れ出勤可能（こどもと一緒に働けます）と掲載しました。1ヶ月の求人掲載で20人を超える応募がありました。正直びっくりしました。面接をする中で、認可保育園に入るためのハードルが高いということを知りました。自治体によっては、就労していないと認可保育園を申し込みすることもできないことや、申し込みができても働いていないのでポイントが低く入園できる可能性はほとんどないと言われたなど様々な声を聞くことができました。

認証保育園や無認可保育園は料金も高く、働いたお金がなくなってしまい働く意味がないといった声もありました。

働きたくても働けないお母さんと、職員が不足している事業所との思いが一致しました。求人に応募してきた職員のほとんどが、介護について知識や経験はありませんでした。まずは家事援助から入ってもらい少しずつ介護の業務に入ってもらうことで、働く側の負担も考慮しました。子連れ出勤という縁がなければ介護の業界とは無縁だった職員も多かったです。

入職後、1年程度でほとんどの職員の子供は保育園に入園することができました。その後は、働く日数や時間を増やしたり、本格的に介護の業務に入ったりと、現在では事業所の人財として活躍しています。

3．地域がさらにつながり広がっていくために：立場を超えて語りあい、一緒に動く

認知症の本人・住民・行政・病院・地域の多様な専門職が職域を越えて暮らしやすい地域を作っていくことが必要であると考えていました。

そこで新たに立ち上げたのが、ファーム・エイド東五反田という取り組みです。ファーム・エイドは、2008年に銀座紙パルプ会館で都市農村交流イベント「ファーム・エイド銀座」としてスタートしました。【ファーム＝農林漁業、農林漁家、農山漁村など】を、都市部や消費地から【エイド＝応援・協力】しようという想いやこだわりに基づき、在来種や国産を守り、育んでいこうという催事であり、試みであり、運動として、マルシェ（商品販売）・フォーラム（意見交換）・メッセ（体験交流）の3本柱を軸に展開してます。

ファーム・エイド東五反田では、地域共生社会の実現や、地域づくり（緊急時に備えた日常からの地域コミュニティの形成）を目指し、相生会町会、品川区、認知症の本人・家族、医療・看護・介護・障がい・児童、地域の商店や企業、大学などの様々な分野に関わる人たちが連携して企画、運営を行うイベントとして2018年に誕生しました。

認知症の本人による講演会では、品川区の認知症の本人たちによる講演会を毎年開催しています。マルシェコーナーでは、こだわりの地方物産をはじめ、東北の被災地の復興支援や地域のお店も出店しています。認知症の本人・家族をはじめとする様々な人たちが参加しているグループ（みんなの談義所しながわ）による物販や、福祉作業所のコーナー、町会のお祭りコーナーな

ど様々な出店がある他、体験コーナーでは地域の病院、薬局が協力して子供たちが楽しめるイベントを行いました。

コロナ禍で開催をどうするのかと話し合いを重ねましたが、「結果として開催ができれば良い」、「開催時に感染者が多ければ中止にすればいい」、「毎月集まって話し合いを繰り返すことが重要ではないのか」という意見から、開催に向けて話し合いを行い、コロナ禍でも中止をすることなく開催できました。認知症に特化したイベントではなく、認知症の本人、家族をはじめ、地域に存在する多様な職種の人たちが、職域を超えてつながり、ともに楽しみながらつながりづくりを広げていける重要な機会になっています。

4．コロナ禍、本人と家族の願いから生まれたあらたな展開：企業とともに

2020年3月以降、新型コロナウイルス感染症の発生とともに各地で開催されていた認知症カフェや様々な集いの場が閉鎖されました。2020年4月～5月に緊急事態宣言が出され、外出などの制限もありました。認知症の本人や家族の行き場がなくなり、認知症の進行やうつ症状の出現、家族関係悪化などが起こり、家族や本人から集える場や話し合いのできる場を何とか再開してもらえないかという声があがりました。

高齢者施設等を使用してきた認知症カフェや集いの場の再開は見込めず、今まで本人たちと集っていた場が使えなくなっていましたが、高齢者施設以外での集える場を検討しました。東五反田倶楽部への異動前から参加していた千代田区の定例会議の中で、千代田区内に本社のあるデニーズを使用して本人ミーティングや家族会が行えないかという話になりました。千代田区と企業の調整の結果、2020年9月に千代田区のデニーズ二番町店で本人ミーティングが開催されました。品川区でも2021年6月よりデニーズ大井町駅前店で開催されました。高齢者施設や公共の施設が使えないコロナ禍だからこそ、新しく始められたのがデニーズとの連携だったと思います。今では、毎月デニーズの美味しいパフェを楽しみに集い、話し合いが盛り上がっています。

コロナ禍で集える場の代わりとしてデニーズと連携し、店舗で本人ミーティング等を開催しました。

おわりに

認知症になってもその人らしく住み続けられる地域を目指して認知症の本人とともに様々な取り組みを行う中であらためて気付いたことは、認知症の有り無しに関わらず、地域で暮らし、働く様々な人たちが出会い、一人ひとりの（小さな）声を大切に語りあい、一緒に動いてみながら人として繋がることの重要性です。

本人も家族も、地域の人たちも行政も企業も、そして介護や医療現場で働く一人ひとりも、無理とあきらめずに職種や職域を超えた繋がりを拡充していくことが大切だと感じています。

そのプロセスを介護職員一人ひとりがリアルに体験することを通して、形式的な「介護」の働き方ではない、『ともに生きていくための暮らしと地域を創る』これからの介護職の新しい働き方、そのための運営体制の道が自然と開けてくると実感しています。